一編

夫婦岡

江戸西行

櫻の瀬

喜鶴堂版

上

四参

へ13
3051
2

特
へ13
3051
2

山東庵京山作
香蝶樓國貞画

夫婦岡櫻の瀬江戸見西行

上冊

芝三嶋町
佐野屋喜兵衛版

此稗史を去年繪圖名所杖と題して世に播しが名所杖の圖會に響く鳴のやうにとて書賈ども而に請ひ家集の杖に携へて繪圖見西行と書号を改めまゝ見返花の櫻木を二編三編の枝を咲せり外題は初編に倣ひ條理に續く燕都繪圖の系を梗概に殘る名所古跡の名称冒して構思も粗々なる嗤笑の作姑書賈の促に答る耳ちゝとはいへども女談浪說は稗官の分とまる所錦室の永晝に繙き蓬窗の夜雨に閲せば児童日の聽聚を驅んかゝんとまゝ戯題

山東京山

福富長者の子
宝之助
頼政が
妓楼に於て
雪日遊楽之図
事は四編に記す

絵図見西行三編上冊

西行三編
おきく
吉十寺休

ろ吉

あた吉

第四のうたあらそふ

どくらくあとーのかと
ぶけちんうこ
のるおとくちあ
いろのさまをかを
ごくるを下ことを酒かりの
肉もうんとがを
ちりぐこ
ひとこと
ひとこを
ねをあさ
ひとこと
ひとこと
ひとこと

ひとこと
ひとこと
ひとこと
ひとこと
ひとこと

京山作
國貞画

第二よ夏のかごは
(三)
ぶつ
(一)
女性考
近刻
京山作
骨董集
北斎画
二編

其二

其三

母

ろまん

ろまん

小一西

ろまん

小つぼ

小つぼ

ろ右
毋衣竹

其二
かぬき
むかしがのうまい

第五打ちくれぬくれのまち目

凹硯禿筆倉卒に草を起し諧謔偎亵唾たきまべき物昏賈奉
おく瑤篇と為し以梓に上せ一梓裴販せまゝば翅を大舞て海内千
翔る錦堂に上り建囱に入る万眼之を剛し千目之を縒く流傳雪
より大なるに莫し以て篇者の幸とし以昏賈の福とす然ども一冊元
益の銭一外有益の米を買べし篇者の罪焉より大なるに莫し是我
以凹硯を碎き禿筆を焼んと欲せ筆硯凜然として人語を為く
云何識ざる王勃に筆を耕て食い心に機て衣る筆は汝が耕器硯は
汝が良田なり之を碎き之を焼資何より来乎必枯魚の恤めと
ん哉孔聖童謡を誦し班氏巷説を取る災我が兄弟に下さこと
勿れ筆硯大に笑て黒涙を流せ余案を拍て大に笑い唾たきまべき物昏賈
奉て昏賈に投ぜ

望月判官別館に於て旅曲水の宴を学

第一 紅川乃吉たび立

第六

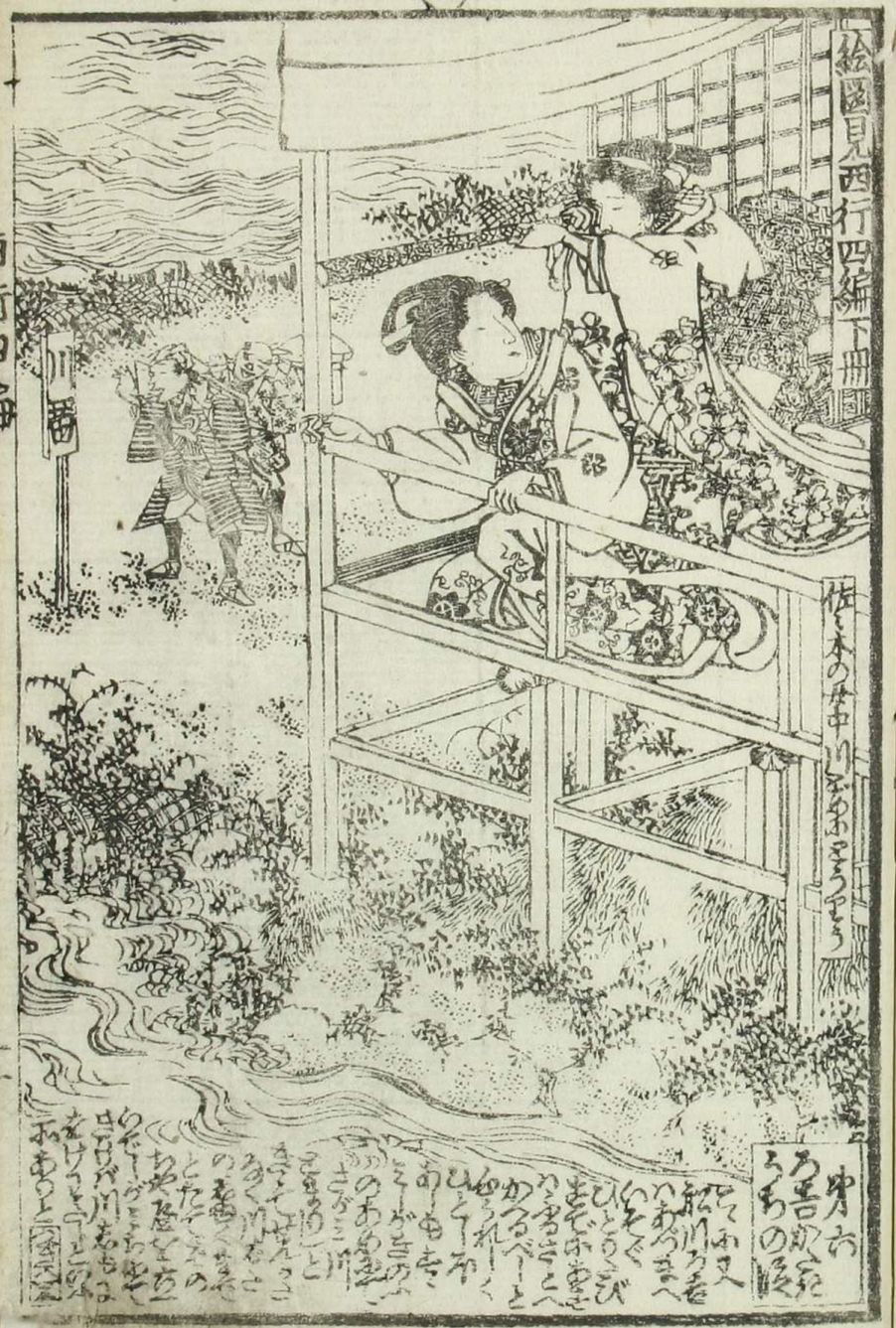
第八

第四

荒中の辻だち

あたらしい
千歳の栄

絵図見西行四編上の終



絵図見西行四編下冊

ろ吉

ろ吉
ごんべ

ろ吉
かまきち
ごんべえ
はつ一の巻

佐々木たろつる
四の巻

五の巻
ろ吉

ろ吉
佐々木たろう

酒行四編

曲水の宴と
唐の
玉巵
三月上巳
蘭亭
詩
盃
詩一首を作る詩の
盃
曲水の宴とそ
人もしあそびをうまうる

ろくすけ

ろ吉

豆丸

豆丸が母菊寿丸

ろ吉の妹

ろ吉

ろ吉の父

ろ吉の母

ろ吉の妻

弘化五年戊申春新版目録

繪圖見西行	山東庵京山作	一陽齋豐國画
八編 九編		
釣竿活梅言月 四冊 讀切	墨川亭雪麿作	溪齋英泉画
青もやう つくしき とりの		
お組繰改琴聲美人録	山東庵京山作	一陽齋豐國画
二編 三編		
教訓乳母草紙	山東庵京山作	一陽齋豐國画
五編 六編		
驊馬猿島内裏 四冊	前太平記三編樂亭西馬作	哥川貞秀画
同三編	樂亭西馬作	哥川貞秀画
念力弓勢譽 四冊		
鎮火五龍圓 取次	のぼせ屋乃妙業	

東都芝神明前三島町角
佐野屋喜兵衛板

教育勅語

5